４０年つれづれの記

横山　武

はじめに

発足以来４０年というのは、決して短い年月ではない。10 年一昔とか、30 年一世代とか世間ではいわれているが、それらを遙かに超えている。企業や役所では 3 年ほどのローテーションで、仕事を覚えて昇っていくらしいが、40 年といえば、新人のペイペイだった人間でも、一応は上り詰めて、運が良ければ出世して、錦を飾って辞めていくのに十分な長さであろう。尤も、人間の個々人の営みの体験的な時間の長さなどは、一見悠久とも見える山川や天体などの被造物がもつ時間の長さに比べれば、何ほどのものでもないことは誰にでも分かることだが、その時間を意識的に取り上げてその意義や評価をすることができるのは人間だけであることを考えれば、時間とその経過を、その長短にかかわらず大切なものとして受け止め、時間の経過が生み出す結果についても、今の時点において正しく理解し、かつ未来においてそれらを適切に活用しようと努めることは、「神のかたち」に創られた被造物である人間としての、創造主なる神の御心に従って生きる応答の姿の一つとして大切なことであろう。

日本福音主義神学会の発足 40 周年が一つの節目となり、今後の更なる発展のマイルストンとして、日本の宣教と正しい神学形成のためになくてならない存在として、福音派のみならず日本のキリスト教界の全体に貢献する神学会、さらには世界にその名を示す神学会として成長することを祈念したい。

Ⅰ　日本福音主義神学会の発足まで

物事の出現は、何事でも同じだが、ある日突然一夜にしてできる、等ということはないわけで、神学会の発足も当然ながら、それなりの期待や要望をになった流れの中でスタートを切ることになったわけである。では何故、４０年前に日本福音主義神学会ができたのか。どんな理由で、何が原因で、どのような時代の流れによって、いかなる教会的事情に動かされて、などなどのいろいろな要素や条件が絡み合って出来たものであることは確かであろう。

そのあたりの答えは、戦後の日本のキリスト教界の流れの中に見え隠れしているわけで、さいわい戦後の日本のキリスト教界や教会の流れや歴史についての著書や論文は少なからず公にされており、誰でもが読めるわけだが、今は先ず個人的な事柄を交えながら語るのをお許しいただきたい。

終戦（1945 年）後の 10 年ほどは、キリスト教と日米関係の上げ潮時期で、ほとんどの事柄が期待に添って上手くいった時代であったことは、おおかたの人々が認めるところである。日米関係はさておき、キリスト教界について言えば、人々の関心は好意的にキリスト教に向けられ、教会の礼拝や伝道会に集まる人も多くなりクリスチャンの数も増えていった。これらの社会的背景としてはいろいろ考えられるであろうが、敗戦によって喪失した精神的、かつ生活的な失望感と不安感と同時に、荒廃と困窮のさなかにある日本社会を支えてくれたアメリカの物質的援助とその背後に見えたキリスト教の愛に対する信頼と関心が表裏一体となって当時の時流を形成していたといえる。

当時を代表するような出来事としては、賀川豊彦師や木村清松師らによる全国伝道の展開とラクーア音楽伝道団来日による全国巡回伝道（両者共 1950 年）があげられる。当時筆者は、東北の小さな町の宣教師の聖書研究会に出ていたのだが、そんな地方の無名の町にまで賀川豊彦師が来て、模造紙に墨汁で書きながら（師は黒板と白墨は使わないとのことだった）キリスト教の集会が開かれたのを思い出す。しかも町役場が会場の世話をして多くの町民も出席するという、当時としてはちょっとしたイベントだった。

その頃上京してメソジスト系のミッションスクールで勉強を始めたのだが、文学部の神学科にいろいろな神学生が在籍しているのにおどろいた（筆者は他

学科に在籍していたがクリスチャン学生として神学科の学生との交流もあったし、当時から現在までお交わりのある尊敬する先輩教職者の方々もおられる）が、さらにショッキングだったのは、自分の属している、いわゆる“福音的グループ”の市民権が、その当時のキリスト教界ではほとんど認められていないという事実を知ったことであった。

終戦後 10 年間ほどつづいた、日本のキリスト教界と日本文化や社会との“蜜月時代”は、現在でこそ反省をこめて語られることが多いが、上京入学した 1951 年頃は蜜月時代のど真ん中で、周りのクリスチャン達から受けた率直な印象は、豊かなキリスト教国アメリカが疲弊した敗戦国日本社会の民衆のために愛の手をのばす働きの支援者としての特権的使命に満足している姿、とでも言うようなものであった。過去には何もなかったかのごとくに、直近目前の事柄だけに楽観的、かつ積極的に関わる姿には、意気軒昂な若者のようなエネルギーの発露があったのかも知れないと、今にして思えなくもないのだが。戦前戦中の在り方への自問と反省が表に出て来ることになるのは、種々の要因によって社会の潮流が代わってからの、もう少し後になってからのことである。

当時の日本のキリスト教界の主流と言えば、なんといっても日本基督教団であり、また日本基督教団から終戦後に直ぐに脱退した戦前からの教団・教派であった。その頃に、ミッションスクールに入ってくる学生でクリスチャン活動をするような若者は、ほとんどが日本基督教団あるいは戦前からの教団・教派の教会に属する信者であった。そのような彼らから見れば、たった数年前に日本にやってきた外人の宣教師が東北の小さな町で始めたばかりの教会が、ずっと昔から続いている自分たちの教会と同じレベルのものとは考えにくかったのかも知れない。

確かに、終戦直後のその時期は、外国からやってきた新しいキリスト教団体や教派の働きが、俗に言えば雨後の竹の子のように、日本のあちらこちらで始まった時期でもあった。にわかに増えたそれらのキリスト教の活動は、言ってみれば、敗戦という外圧的な未曾有の国家的変革によって起こった新参の働きであり、以前から続いてきた自分たちのものとは違う、いわば亜流的なものと評価されることが多かったように思われる。あるときクリスチャンの上級生が忠告して、“君はいつも聖書ばかり読んでいて真面目だが、キリスト教をもっと

学問的に研究して、それから世の中のことも、勉強したほうがいいよ”と言ってくれたのも，その頃であった。

それらの新参グループの特徴は、後年、いわゆる“福音派”と呼ばれるようになるような神学的立場に立つ団体がおおかった。当初は、“伝道は熱心だが学問的な研究レベルは低い”という類の批評を受けることが多々あった。このあたりの事情についてごく最近に宇田進師が、エリクソン博士の「キリスト教神学」(1・2 巻合本) の監修者として、<監修者あとがき>で、簡潔にではあるが率直にかつ分かり易く言及しておられるのでご参考までに。[M. J. エリクソン,「キリスト教神学」(1・2巻合本), 2010年4月, いのちのことば社, pp. 250-52]

しかしそのような流れやありようも、日本の戦後の状況がある程度、社会的、経済的に安定してくると変わるようになる。キリスト教界でも変化が起こってくる。その一般的な現象としては、教会に集まる人がだんだんと少なくなっていくのだが、もう一つの変化が、現れてくる。それまで日本のキリスト教界で亜流的な評価を受けていた、いわゆる福音派のグループが大同団結して、社会的なインパクトを与えることができるような宣教大会を開けるほどに成長したことである。

終戦後11年目の1956年に世界的な伝道者であるビリー・グラハム師を招いて、東京と関西で大伝道会を開いたのを皮切りに、その後は数年おきにいろいろな形での全国的な宣教の大集会が開催されていくことになる。もちろんこれらの大集会は、福音派といわれる人々や教会だけが閉鎖的な在り方で開催したわけではなく、イエスの宣教大命令を聖書の教えの正統的な枠組みのもとで推進実行しようとしている教会はみな、協力を呼びかけられたので、伝統のある古い大教会も積極的に参加協力した例も数多く見られた。むしろそのような協力の形は、さらに大きな日本のキリスト教界の一致の流れの促進に貢献するように働いたとも言えよう。

この時期に福音派の諸教会がおもに協力して行った、いわゆる大伝道会はいくつか数えられるが、ワールド・ビジョンによる大阪クリスチャン・クルセードの開催 (1959) がある。2年後の1961年には同じくワールド・ビジョンによる東京クリスチャン・クルセードが開かれている。これは東京都体育館で行わ

れ、30日間で延べ約23万人に近い人々が出席したと記録されている。さらに1964 4年には東京福音クルセードがあり、1967年は再びビリー・グラハム師を迎えての、日本武道館におけるビリー・グラハム国際大会が開催されている。

これらの10年以上に及ぶ大集会時期の種々のイベントは、終戦に続いての蜜月期が過ぎて潮が引くように教会から人々が去っていった時期に、なおも人々の関心を福音に向けさせる宣教の大切な使命を担うはたらきであった。と同時に、戦後、個々ばらばらに日本宣教を始めた福音派の各教派・教団が<日本人伝道>という共通使命のもとに協力・協労する働きを通して、巧まずして相互理解という尊い宝を共有するように導かれたという摂理もまたあったといえよう。

このような摂理的な、時間をかけたバックグラウンドの整備の上に、いよいよ福音派の神学的なバックボーンの形成を志向する“学会”のための胎動が始まるのである。そしてそれは、聖書の真理に基づく、より確実で着実な日本宣教のトーチとなるべき日本福音主義神学会の誕生 (1970年) へと続く道となっていった。

Ⅱ　発足の頃

日本福音主義神学会の発足は、日本のキリスト教界における福音派の存在がもう一つの市民権を得るための最初のステップでもあったのだが、それはそれとして今は、発足当時の学会の興味ある特徴に目を留めたいと思う。

新しい組織が生まれて働き出すためには、何であれ一定の共通する手続きを踏んで動いてゆくものであることは誰でも認めていることであり、神学会の場合もその点、例外ではなかった。俗に言えばつまり、先ず“言い出し着火マン”がおり (一人とは限らないが普通は片手以下の数)、それに“共感するもの”が少数 (多くとも一桁以内) いて、彼らが相談して目的趣旨や組織の輪郭を考えて“一般の賛同者”を誘い、ある時点で発会式や設立総会をもって働きを始める、という図式である。とは言うものの、事柄が図式どおりに運ぶためには、人々の関心がそこにあり、それが関わる社会や時代のニーズが潮時である、という前提条件が必要なのである。それらの条件を欠くと、<笛吹けども踊らず

＞現象で終わってしまう。

日本福音主義神学会が1970年にめでたく発足したということは、終戦後25年の間、福音派のそれぞれの教会が、その発端・背景はいろいろに違いがあり、時には古参の教派・教団には無視され、誤解に出会っても、時には冷たく扱われることがあっても、ひたすら福音宣教の正道を歩みつづけてきたことの証しでもあった。さらにそれは、福音宣教の熱心さに加えて、より円熟した，上質で適切な宣教活動の展開を可能にする貴重な手掛かりを福音派が得たことでもあったといえる。

さてその、日本福音主義神学会誕生の最初のいわゆる“呼び水”となった先生方であるが、(当時の状況についての、筆者の記憶の独断的な想起をお許しいただきたいのであるが）発足会ともいうべき最初の集まりには、会場であった練馬バプテスト教会（日本バプテスト教会連合）牧師の泉田昭師、村瀬俊夫師（現日本長老教会)、矢内昭二師（日本基督改革派教会)、今野孝蔵師（神の教会連盟)、斉藤孝志師（日本ホーリネス教団）の方々がおられた。(その他にもおられたかも知れない。)

以上の方々が皆、教会に仕える牧師であったという事実の中に、“学会”である“神学会”の根源的な性質が表現されていると言えるのでは無かろうか。それは「規約」の第四条（目的）で“・・・教会の健全な成長と発展に奉仕することを目的とする。”と文言化することによって定着したものとなっている。それらの先生方はそれぞれ神学校でも教鞭を取り、それぞれの専門分野での活動と研鑽は、“学者”と呼ばれるに値する足跡をもつ方々であるが、にもかかわらず、もっぱら地区教会に仕える牧師であることを通して、キリストの教会への献身を証ししているのであり、そのような原則的軌道の上に神学会の誕生もあることを忘れてはならないであろう。

Ⅲ　初期の頃

神学会が発足し、いろいろな活動が始まると、それまでには無かったような領域の活動も現れてくるようになる。その一つに、海外の神学研鑽関係の団体との交流がある。発端はだいたい、神学会に加わっている福音的な教団・教派

の宣教師方や海外の神学校や大学などで学んだ神学会のメンバーの方を窓口としてのアプローチが多かったようだが、こちらの日本側としては当然、神学会が窓口となるわけである。国際会議などへの参加の誘いなどが多かったように思う。とくにＡＴＡ（アジア神学協議会）との交流は、初期の頃から顕著で、当時リーディングメンバーだったボン・ロウ師が日本の福音派の神学界の将来を予測するかのごとく、アクレディテーションの問題をも含めて、神学教育のプログラムなどに熱心に前向きだったのが印象的である。神学校教育に関わりの深い神学会メンバーを中心に、関西の先生方をも含めて、おなじく前向きに受け皿作りの対応に努力されたわけだが、当時としては神学会の国内の充実や拡大の課題もあり、先方が期待する通りの迅速さで対応するのが難しい面もあった。

しかし、神の時が流れ、機が熟したというべきか、日本の福音派が神学教育の面でもある程度の整備充実を見ている今日、ＡＴＡの神学研鑽の理念が日本でも実を結び始め、福音派教会の牧会者の方々がつぎつぎに、それぞれの専門分野での学びを実らせて学位を取得し、福音信仰（福音派の立場を礎として構築される信仰）のより確かで良質なレベルでの福音宣教と教会の形成・発展の業に励んでいる事実は、＜水の上に播かれたパン＞が神のご計画の御手の中で整え育てられ、やがて＜主の喜ぶ業＞を担うものとなって実を結ぶとの御言葉の真理の実現の姿であるといえよう。そこには、神学会の表に見える顔はないが、日本の福音派の神学と教会の確立・発展のために果たした意義と役割は、深く静かに主の御前で今も輝いているのである。

ところでＡＴＡとの交流のチャネルができてまもなくの頃、韓国のソウルで神学会議が開かれることになり、今野孝蔵師と２人で出席したことがあった。10年ほど人生の先輩で、戦後来日された宣教師方と日本神の教会連盟を再構築された先生のお話は、さまざまな点で示唆に富んだものであった。同連盟の議長の重責を担い、練馬神の教会の牧師として日本福音主義神学会の誕生に関わるリーダーの一人でもあった。

会議での資料は残念ながら手元にはないが、当時は、日本から韓国へ行くこと自体が、種々の困難をともなうことであった。日本や日本人に対する拒否感は厳しく、教会やグループで話をする最初には必ず、過去の、日本の統治時代

の謝罪をするのが常であった。街の中では日本語を使わない方がいい、等と親切に勧める人もいたほどである。会議は岡の上にある神学校で持たれ、宿舎は神学校の寮だったので街へ出かけることもあまり無かったが、ある晩突然、街中に響くようなサイレンが鳴り渡ったのでびっくりした。何事が起こったのかと窓を開けてみると、街の明かりがつぎつぎと消えて行くではないか。そして街はアッという間に真っ暗になってしまった。“すわ朝鮮戦争の再開か！”と思ったりしていささか慌てたが、そうこうしているうちに（20分も経った頃だろうか）、街のあちらこちらにまた明かりがつき始めて、間もなくもとのように明るい街に戻っていった。翌日聞いたところによると、当時は時々行われていた、突然の防空演習であるとのことだった。日本では分からない、38度線を境とする国際間の緊張を体験する貴重な出来事であった。

Ⅳ　全国研究会議のこと

神学会の規約によれば、神学会の目的を達成するために行う事業の最初に＜研究会の開催＞が挙げられている。発足の当初はとくに、神学会の看板事業のような趣も感じられ、春と秋の年に二度、都内の主な教会などを会場に開かれていたと記憶している。しかも夜は、事業目的の二つ目にある＜講演会の開催＞も引き続いて行われるのが常であった。そこには信徒の方々も大勢集まり、けっこう賑やかな集まりが持たれていたものだった。いつしか夜の講演会は持たれないようになっていったが、やがて関西にも神学会の働きが生まれるようになり、西部部会と東部部会ができるにおよんで、全国レベルでの研究会が開かれるようになっていった。

全国研究会は毎年持たれるわけではないが、各地区部会での研究会とはひと味違った研鑽や交わりがそこにあることは、出席されたことのある諸氏の誰もが感じていることではなかろうか。“天城山荘での研究会はやたらに寒かった”などと、本筋に関係のない印象が強烈に残っているものがあるのもご愛敬だが、筆者の記憶にとくに強くある全国研究会の一つは、シーパル須磨（神戸市立国民宿舎）で開かれた第8回日本福音主義神学会全国研究会議（1996年11月）である。

その主題であった「今日の宗教的混乱と宣教の責務」（副題：真の宗教性の回復のために）をめぐる学びもさることながら、最も印象に残ったのは開催地神戸の街であった。あの阪神・淡路大震災から僅か1年10ヶ月ほどしか経ていない神戸の街のあちらこちらには、まだ当時の爪痕をのこしているものが数多くあり、今更のごとく胸の痛む思いであった。と同時に、この研究会議に集った全国の神学会のメンバー達が、神戸のクリスチャン方の痛みを肌で感じながら、ともにみ言葉に対峙し、ともに宣教の使命を担い合うための学びと交わりができたことは、この地でのこの時期ならではの特徴ある研究会議であった。

研究会議の主題に関わる学びもまた、実り豊かなものがあった。丸山忠孝師の基調講演を中心にした諸先生方の発題講演などが4つなされ、応答としては滝谷良一師、藤本満師、金本悟師方など4人の先生のレスポンスがあり、時にはフロアからの質問等も加わるというスタンダードな形式で進められた。参加者はそれぞれ、発題者やレスポンスから多くを学んだことであろうが、個人的に最もインパクトを受けたのは、丸山忠孝師へのレスポンスで滝谷良一師が取り上げている事柄であった。その一つは、今日の日本社会の基本的な宗教的実相は自然宗教（つまり、神、自然、人間が一元的に共存する世界観）の文化ではないのか、という課題の提起であり、またさらに、西洋の経験したヘレニズムや中世や近代もそしてポストモダンも今日の日本の社会と文化にとって無縁の系譜のものであるとすれば、この事実に、外国の宣教師が日本宣教に用いた方法論が的外れで、キリスト教が日本で伸びない理由があるのかも知れない、という示唆であった。

Ⅴ　部門活動のこと

神学会では五つの部門があって（細則第6条）、それぞれの専門分野での活動が進められているわけであるが、どれもが同じように活動しているわけではなく、賑やかと閑散の差があるようだ。歴史部門におもに関わりをもってきた者として感じるのは、この部門は繁昌隆盛と言うわけにはいかない部門である、ということである。世間では歴史ブームとか言われているのに、などと思わないわけでもないが。

歴史部門との関わりをもつようになったのは、石原謙先生の「キリスト教の源流」と「キリスト教の展開」（ともに 1972 年、岩波書店）が出版された頃で、「キリスト教の源流」の書評を神学会誌に書いたのがきっかけだった。書評の中で、＜教会史の出来事が説教の例話に顔を出す程度にしか、歴史神学の市民権は、神学界の中で無いのだろうか＞のような意味のことを書いたことに、当時、神学会の歴史部門の理事だった泥谷逸郎師が甚く同感して下さり、そのようなきっかけで、歴史部門との関わりが深くなっていった。

しばらく後になって、なんとか歴史部門を盛り上げようとのことで、現在の基督教大学で当時教鞭を取っておられた、湊晶子師と丸山忠孝師が中心になり、みんなで話し合おうということになった。東部部会名簿の専攻分野の項目に、教理史とか教会史とか歴史神学関係の事項を書いてある方々全員に案内を送り、お茶の水会館の一室を借りて待つことになった。予算の都合で小ぶりの部屋を借りたのだが入りきれなかったらどうしようと心配したり、湊師はお茶まで用意して下さったと思う。でも、時間になっても誰も来ない。そして最後まで３人だけだった。お二人の先生方はその後、日本や世界の分野で活躍されて、今でも背後から神学会を支えていて下さっている。この部門の分野での教会的ニーズの開発に的を絞ることができれば、神学会のみならず日本の教会にも多大な貢献をする可能性を担っていると信じている。

さらにどの部門であれ、部門活動の充実は、神学会が「教会の健全な成長と発展に奉仕する」ために存在する学会として、その最前線を担う重要な働きであり、常に大切な課題として心がけるべき事柄であろう。

（日本バプテスト教会連合・東京中央バプテスト教会牧師）